

1958年：アンジェラ・エリオット

コーの学校にて

1950年代と1960年代は、第二次世界大戦後の和解と平和のために世界中で活動するチームによって、MRAが拡大した時期でした。多くの演劇やミュージカルが世界中を訪問し、ラテンアメリカ、インド、日本、アフリカの数カ国にMRAのセンターが建設されました。

MRAのフルタイムで働く人々の中には、幼い子供を持つ夫婦もいました。必要な時に両親が旅行できるように、時には他の大陸へも旅行できるように、子供たちに安定した生活と教育を提供するために、コーに学校が開設されました。飛行機での移動が高額で稀だった時代には、子どもたちの多くは、何カ月、あるいは何年も両親に会えませんでした。

それは親にとっても子どもにとっても大きな犠牲でした。コーの学校での日々を良い思い出としていた子供たちがいる一方で、非常に困難な時代であった子供たちもいました。

アンジェラ・クック（後のエリオット）が1958年にコーに来た時は4歳でした。両親がドイツ、アジア、アメリカのMRAで働く間、彼女はその後5年間をコーで過ごしました。アンジェラは、1955年から1965年までの間にコーで生活していた40人ほどの子供たちの一人で、会議場から山を登ったところにある小さな木造の学校に通っていました。

アンジェラにとって、両親との別れは、彼女の世話をした若いイギリス人女性、ジル・ダン（後のローマン）の「とても頼りになるケア」によって和らぎました。しかし他の子どもたちにとっては、耐え難いことでした。

なぜ母親や父親が、小さな子供をこんなにも長い間放っておくのでしょうか？ その答えの一端は、彼らが目の前にしていた仕事の緊急性にあります。

両親の多くは二度の世界大戦を経験し、三度目の大戦の恐怖が現実のものでした。アンジェラの母親は数年後アンジェラに、自分たちの仕事が戦争を回避する助けになると信じていた、と語っていました。ヒトラーのドイツで育った人にとって、それは仕事をする強い動機でした。

ジョン・ボウルビィによる小さな子供を母親から引き離すことの心理的危険性に関する研究は、この当時はまだ知られ始めたばかりで、両親、あるいは教師や保育士（ボランティア）がそれを知っていたとは考えにくいことでした。彼らは、子供たちを安全な場所に預け、そこで良い教育を受けさせることの犠牲は、子供たちではなく自分たちの犠牲だと信じていました。

アンジェラの思い出のほとんどは晴れやかなものでした。春には野生のスイセンを摘み、夏にはハイキングやピクニックを楽しみ、牛のベルの音を聞きながら眠りにつき、学校近くのカーブの多い山道をそりで滑り、スキーで白く輝く景色の中を飛ぶように滑りました。当時は一年中会議が続き、世界中の人々との交流が子供たちに広い視野を与えました。

アンジェラは言います。「子供だった私は、このような日々のリズムに疑問を抱くことはありませんでした。比べるものがなかったからです。後になって初めて、私や両親にとって長い別離の代償を理解し始めました」。

他の子どもたちは、もっと困難な状況に置かれていました。両親の不在、保育者の頻繁な交代、多忙な会議場での生活は、彼らの子供時代と大人になってからの生活に影を落としました。家庭と学校の境界が曖昧になり、誰よりも大切な人のいる家庭に戻るができなくなったのです。

2006年、マリオン・ポーティアス（旧姓マンソン）が夫と成長した娘たちを連れてコーを訪れた際、彼女は訪問者名簿にこう記した。「素晴らしい和解活動の一方で、子供たちは苦しみました。いつか私たちの物語が聞かれる日が来ることでしょう。」

2009年、コー・ブックスはこの要望に応え、『Stories of the Gaux School 1955-65』を出版し、当時コーで過ごした子供たち、スタッフ、保育士たちの喜びと苦しみを公開しました。

メアリー・リーン

いつか私たちの物語が聞かれる日が来ることでしょう。



Children and teachers of the Gaux School, 1962: Marion seated centre, Angela behind her, right.